

聞名仏教

第 125 号 毎月発行
(発行日) 2021 年 2 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

仏法とは

『仏法とは』

佐々木蓮磨

仏法とか仏教などと申しますと、何か変わった特殊なわけがらのように思われ易いのですが、実は決して変わったわけがらではなく、むしろあたりまえのことなのです。それを変わった特殊なことのように考えるのは、仏教に対する理解がないからであります。

一体、「仏」とは何でしょうか、それは別に変わった存在ではなく、永遠に変わることのない真理を明らかに悟った人を指しているのではありません。昔からよく「迷えば凡夫、悟れば仏」と言われてきましたように、われわれの一般の人間は、もともと迷いの心を抱えて生まれてきた動物ですから、いかに学問を深めても知恵を磨いても、根本の心その

ものが真理に暗く迷うているのですから、恰も盲目の手さぐりのようなもので、正しい姿を明らかに知ることはできないのであります。

しかし現代の知識人がタマタマお寺に参って説教を聞くと、なんだか架空的な根拠のないオトギ話のように受けとりますから、仏教そのものを軽視する傾向があります。

ところが仏教の真理なるものは、対機説法と申しまして、相手の根拠——能力に適應するように説きあらわすものですから、相手の如何によって、ときには右から、ときには左からと、いろいろと相手が見解するようには説かれてきたものであります。そこで、相手の根拠が違っていると、そこにいるいろいろな誤解を招くことになるのであります。

幕末の頃、香樹院という名師がおられました、民衆の教化に大きな功績をあげられたのであります。ところが、師の法話を聞いた一人の門外の学者が、どうも地獄や極楽の話が合点し難いので、法話がすむと、すぐ師の控え間に伺い「只今のお説教を聞きますと地獄の話委しくお説きになりまして、果たしてそのよう

な恐ろしい世界があるのでしょうか」とお尋ねしたところ、師の仰せに「あなたが腹を立てると相手の顔つきが悪人のように見えるでしょう。しかし誤解がとけて怒りの心が消えると、即座に相手の顔つきが一変して善人の如くに見えるであろう、地獄と言っても自分の心をぬきにして考えると不可解に思われるのであるが、ひとたび自分の恐ろしい怒りの心を反省してみれば、日々大なり小なり地獄を作っているのではないかと論されたので、今の学者も、師の説明に深く感じて仏教の深い謂れを了解し、その後も香樹院師の法座に

参られたということであります。ともかく仏の意味は、真理を明らかに悟った人ということでありますから、極めて現実的な存在であって、決して架空的な空想的存在ではないのであります。しかし仏教では真理を説く場合に、決して一方的に決めて説くのではなく、対機説法と申して、相手の根拠——教養の如何によって、いろいろな説き方がなされるわけであります。

従って一つの話聞いて、それが仏教のすべての如く受けとっては大変な誤解を招くわけであります。

そういうわけで、私は仏教に対して不信や疑惑をさしはさむ人達に対して「あなた達は仏法の聞きようが足らぬために、いろんな疑問や不信が起るのです。もし、いろんな不信や疑問が起ったならば、気短かく捨て去るのではなく、むしろ、その問題を徹底的に追求して納得のいくところまで聞きなさい。

そうすれば、いかに疑い

の深い人でも、かならずや最後には疑いが晴れることは必定です」と。

ともかく昔から智者も愚者も、真剣に求めた人達は、智愚善悪の区別なく、みんな一味の信仰に入ったものです。

知恵第一と讃えられた法然聖人の門下には荒武者の熊谷蓮生房が居るかと思えば、愚かな空阿や、かつては泥棒を働いた耳四郎もおりましたが、みな一味の念仏で救われて、大安心と大歓喜の一生を送ったのでありました。

親鸞聖人は八十八歳の十一月十三日に門侶の乗信房に送られたお手紙の中に「信心決定ノヒトハ、ウタガイナケレバ正定聚ニ住スルコトニテ候ナリ。サレバコソ愚痴无智ノヒトモ、オワリモメデタク候へ」と示されております。私は、この聖人の御遺言ともいうべきお言葉を常に口ずさんで喜ばせていたのだと思います。「私の法話集」より

(了)

真宗はどんな仏様ですか

富山県の大谷派寺院の住職さんがご門徒につきのよ

うな質問をされたそうです。

① 「南無阿弥陀仏という仏さまはどんな仏さまですか？」

② 「仏さんはどんなことをいっておられますか？」

③ 「念仏申すとどうなりますか？」

④ 「私たちはどんなふうに迷っているのですか？」

⑤ 「私たちは仏になれるのでしょうか？」

⑥ 「なんで私が仏さまになれるのですか？」

と。

どのように応えるかによ

て、その人がどのように真宗を了解しているかが分かるのです。それで住職さん

がこういう質問をされたのだと思います。

そこで試みに、これらの問いを取り上げて少し書いてみたいと思います。

① 「南無阿弥陀仏という仏さまはどんな仏さまですか？」

真宗は南無阿弥陀仏に救われる教えですが、真宗で「仏さま」といえば、南無阿弥陀仏が私をすくってく

ださる私の、私たちの仏様です。お釈迦様でもなければ、観音様でもありません。いわんや先祖様でもありません。南無阿弥陀仏です。

真宗のご本尊はアミダ仏といってもいいのですが、ただアミダ仏とだけいうと、アミダ仏は光明無量（ひか

りはかりなし）・寿命無量（いのちはかりなし）の広大な働きですので、私たちがアミダ仏とどう接点をもっているかという段になると、なかなか手がかりがつかめません。しかるにアミダ仏はご自身を限定して南無阿弥陀仏という言葉となつて私たちに現れてくださった、それゆえ私たちは身近にアミダ仏を感じる事ができるのです。これが他のご宗旨にはない真宗の大事な特徴の一つです。

なぜアミダ仏は私たちに接するのに言葉にまでなつて私たちに働きかけてくださるのか。それはアミダ仏に直接たずねないと分かりませんが、たずねることは不可能ですので憶測するしかありませんが、人間は相手の心を知るはその人の言葉を聞くことによつて知

ることができま

ります。それが同じでアミダ仏はご自身の心（仏心大悲）を人に知らせるのに言葉でもつて知らせたものではないでしょうか。

アミダ仏ご自身のお心とは本願のお心であつて、本願のお心はこれも釈尊が大無量寿経の説法によつて私たちに知らせてくださるのです。

大無量寿経に説かれているアミダ仏の四十八願、なかでも第十八願にアミダ仏の大悲のお心が説かれています。第十八願のお心はさらに南無阿弥陀仏という六字の言葉となつて、私たちにアミダ仏のお心を表現なさいます。

それと「南無阿弥陀仏」という言葉ですが、それは本来、文字に書かれた言葉というより、音声となつて

です。たとえば母が子を呼ぶ場合や子が母を呼ぶ場合のように、一番原始の言葉はやはり実際に声で呼ぶ言葉ですね。「○○ちゃん」とか「坊や」とか「オカアちゃん」など。

声となつて喚びかける言葉が一番身近なナマの言葉です。一番伝わる言葉です。一番直接的な言葉です。しかも声となつた言葉は一瞬、生まれて消える言葉です。ですから音声の言葉は掴めません。書いてある文字の言葉は掴むこともできましようが、声になつた言葉は掴めません。

生きたものであり働いているものであり、私を超えて私を包んでいるような大きな働き（アミダ）は掴めません。私の掴んだものは一部であり、影にすぎません。殻にすぎません。アミダ仏は広大であつて、私を包んでおり、私の成立根拠であり、私を超えた量りないのちであり、つねに今、今と流動しつゝあるものです。これは掴めません。

こうしてアミダ仏は一瞬

一瞬声となつて「南無阿彌陀仏」と私に現れてくださいます。掴ませないのです。掴ませないでお知らせ下さるのです。自我で掴むと自我はそれを利用して更にはうからず。アミダ仏は私が掴む必要はなく、すでに私を掴んでいるのです。こちらから掴む必要はなく、すでに私を掴んでくださっているのです。

アミダ仏はナムアミダブツという音声によつて、私を既に掴んでいたもうご自身の存在を知らせてくださるのです。

音声というのは存在していることを知らせますね。先日床の下で「ニャーニャー」という野良猫の声をしました。寒いので床の下に潜り込んで鳴いているのです。「ニャーニャー」という声で、見えなくても猫が居ることが声によつて分かるのです。

アミダ仏も「ナムアミダブツ・ナムアミダブツ」とご自身を名告つて下さいませ。一声一声のお念仏が耳

に「汝とともにいる」とお知らせくださるのです。アミダ仏が私とともにいてくださる、このことを知らされる外に救いはありません。

「無限者が共にいてくださる」というこのことは真宗だけではありません。キリスト教でもこのことは同じです。20世紀最高の神学者であつたカール・バルトの回心について、滝沢克己先生が、

『虚しく社会的キリスト教の運動に疲れ果てて、幻滅の谿に彷徨いつつあつた或る日、或る時、彼（バルト）は突如として、「めでたし、恵まるる者よ、主なんじと偕に在せり」という御使いの挨拶を聞いた―今始めて聞くが如き驚愕と賛美とを以てはつきりと聞いたのであつた。』（「カールバルト研究」）

と言つています。こうしてカール・バルトはこの回心以後、彼の深い神学を打ち建てていったのです。

「無限者がわれらとともに

に今まします」ということを何で知るか。そこに宗教の大きな課題があります。それを真宗では、アミダ仏のみ名（南無阿彌陀仏）を人に称えさせ、聞かせて、

その人の身に聞こえしめることによつて、アミダ仏が今私たちとともにましますことを知らせたもうのです。

すなわち私という人間存在はいつでも現在にしか存在していませんので、南無阿彌陀仏の音声は過去でもなく未来でもなく、今、今に現れ、今、今に消えることによつて、私につかませず、現にアミダ仏が私をつかまえてくださっていることを知らせてくださるので

「御声が親様である。活仏はこれじゃ」（「求法用心集」と、名師であつた禿頭誠師は言われています）

アミダ仏は南無阿彌陀仏という音声となつて私たちに喚びかけてくださる。それが称えるお念仏の声なのです。ですから南無阿彌陀仏とお念仏を申すとナムア

ミダブツと耳に聞こえてきます。その一声一声は阿彌陀仏がご自身を露わとなつてくださるお声なのです。喚び声なのです。曾我量深先生は

「南無阿彌陀仏は生ける言葉の仏身なり」と

と教えてくださっています。アミダ仏である大悲の仏身が生きた言葉である南無阿彌陀仏のお念仏となつてまで私にご自身を表し示してくださるのです。ここに実に大いなるアミダ仏の大悲の活動があります。阿彌陀仏の驚くべきご配慮、ご苦心があります。五劫思惟の結果があります。

松並松五郎さんが「称えるお声が 活仏 よばれているとは 知らなんだ 不思議不思議の 南無阿彌陀仏」

「見えぬみ親に あいたい時は 六字となえて 声であう ほんに念えば有難や」
「一度六字で 親にあう 笑い声する 親と子の 口に聞こゆる南無阿彌陀仏」
などと詠んでくださっています

ます。有り難いですね。声の仏が南無阿弥陀仏、これは何でもないようですが、これがあるから、私たちはいつでもどこでもアミダ仏にアえるのです。真理にアえるのです。人生の根本真実にあるのです。

外の道は色々ありますが、神と云い仏と云っても、普通は私たちの现实生活からは遠く、離れて感じているではありませんか。

こうしてアミダ仏は南無阿弥陀仏の声となって衆生にその存在を知らせようとされますが、だれがもともとそういうことをいわれたのか。それは積尊です。積尊が大無量寿経に説かれたのです。それによりますと、法藏菩薩（アミダ仏の因位）は第十七願に

「たとい我、仏を得んに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して、我が名を称せずんば、正覚を取らじ。」

と、十方の諸仏にアミダの名を讃えられ称えられたいと誓い、さらに『重誓偈』

に

「我仏道を成るに至りて名 声十方に超えん。究竟して聞こゆるところなくは、誓う、正覚を成らじ、と。衆のために宝蔵を開きて広く功德の宝を施せん。常に大衆の中にして説法師子吼せん」

と誓われ、それを実現されたのです。ここで南無阿弥陀仏の言葉を名声と云われ、その名声を聞こえないところがないように衆生に聞かせたいと誓われたのです。

アミダ仏は南無阿弥陀仏の名となり声となって私たちに聞かせずにはおかないと誓ってその通りに働いておられるのです。

そしてこの御名を私たちに称えさせ聞かせるために、諸仏善知識（先達）が南無阿弥陀仏の名をほめて（説法）、自らも称えることによつて、衆生がそれを聞いて、「それほど有り難い南無阿弥陀仏の名号なら私も称えましよう」と称えるようになる、それを十七願の「諸仏、ことごとく咨嗟して、我が名を称せずんば」と誓

われたのです。先達であり、善知識である方々が南無阿弥陀仏は有り難いとたたえられる、それを聞いて私たちも称えるようになるのです。

称えればそのままナムアマミダブツと聞こえるのであります。このナムアマミダブツは私の口から出てきた名ですが、その元は「どこどこまでも衆生に聞かせずにはおかない」とのアミダ仏の誓いの力から現れたのであります。しかもナムアマミダブツのお声がそのまま生けるアミダ仏ご自身のお声であり、「御声が親様」なのであります。この御声によつて私たちは生けるアミダ仏に摂取されていることを知らされるといふ幸せをいただくのです。

ではこの南無阿弥陀仏は私に何を告げ知らせようとしておられるのか。そのことは次の②「仏さんはどんなことをいっておられますか？」の質問になりますので次回にいたします。

（了）

【住職雑感】

文中のバルトのことですが、昔、大阪で万国博覧会があり、スイス館に入りましたらスイス生まれのバルトの写真が飾ってありましたから、スイスでも有名な人なんだなあと思いましたが、後に、英会話少しを習っていたスイス人に「バルトを知っているか」と尋ねましたら「知らない」との返事でややがっかりしたことがあります。カール・バルトはモーツァルトが大好きで、朝食後はモーツァルトを聴くのを楽しみにしていたそうです。彼の言葉に「私がこの世で死ぬということはモーツァルトが聴けなくなるということだ」とありますが、なかなか意味の深い言葉です。裏から云えば死ぬことは特別深刻なことではない、軽やかなことだという意味が入っていると思います。バルトはカルヴァン（カルビン）の絵とモーツァルトの絵を同じ高さで書斎の壁に掛けていたといわれています。またこんな話もあります。著名な赤岩牧師は若い頃バルト神学に心酔しバルトの言葉を金科玉条のように信奉していました。が、バルト神学の中に肯う事の出

来ない教説があり、それで苦しんでいた時、あることによつてバルトから解放されたといっています。それはバルトは（モーツァルトが最高の作曲家である）と云っていたことに對して、赤岩は（バツハがいるじゃないか、モーツァルトが最高とはかならずしも云えない）と思ひ、それからバルトも絶対ではなく偏りがあると考え、バルト絶対主義から解放されたと云っています。それでバルト神学から解放されて、イエスキリストの理解に對してバルトと違つた理解をするようになったのです。赤岩はバルトの贖罪復活のイエスという神学か

ら離れて、イエスを一人の純粋な目覚めの人いわば積尊のような人として理解するようになったのでした。どちらが正しいかというようなことは別にして、バルト絶対主義から開放されたきっかけが面白く、バツハの好きな私には大変興味深い話です。これも youtube で見た記事ですが、バツハ愛好者の人が「バツハはまり込んでバツハから出られない幸せ」とあつたのも言い得て妙の言葉だと感じました。

（了）

『近代教学と伝統宗学の接点』を出版。

私家版で出版しました。ご購入用の方がございましたら、お送り致します。

住職